柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話:070-1503-6401、044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 120 号

シリーズ川崎の歴史を知ろう！
「川崎の文化財」-19

麻生区内における旧都筑郡地域の古代の様子を想像してみましょう（5）　～旧都筑郡地域の遺跡④～

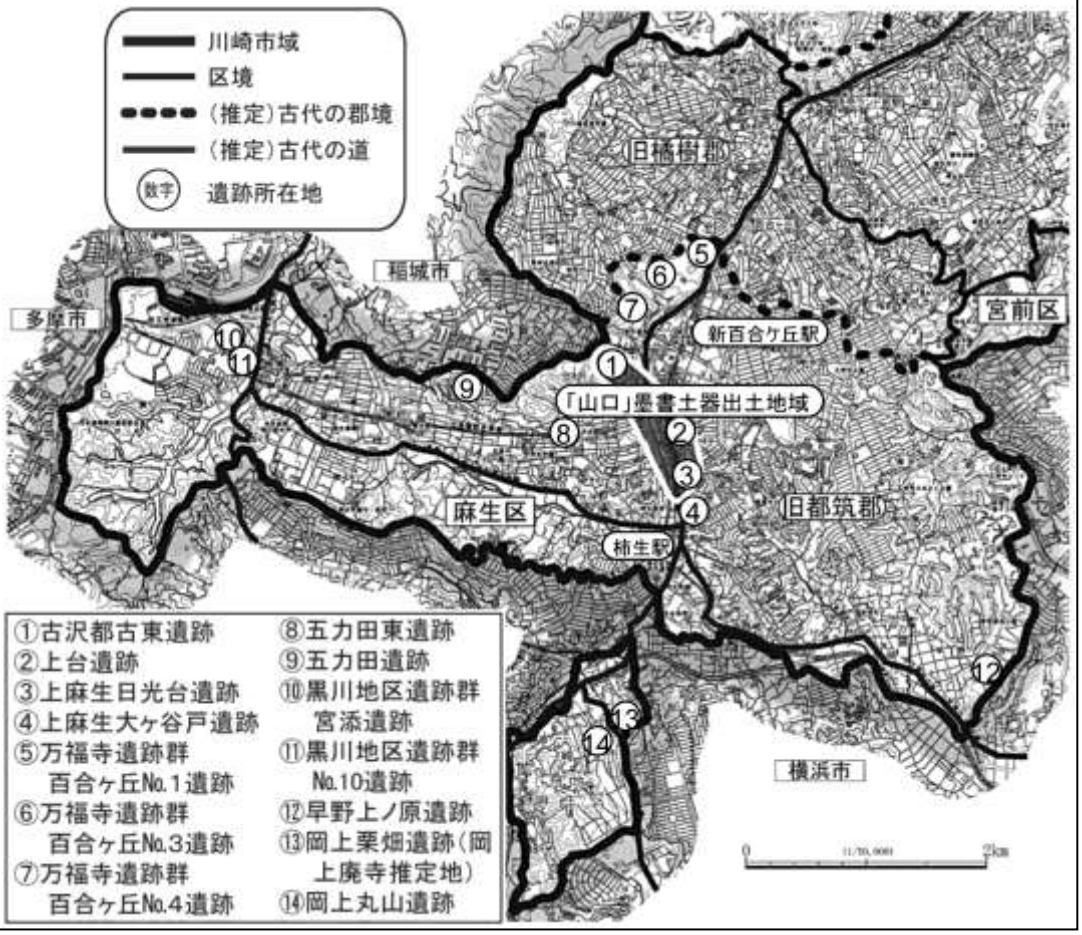
川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員　栗田　一生

今回は、「麻生区内における旧都筑郡地域の古代の様子を想像してみましょう」の第5回目です。前回までお話ししてきました川崎市域の旧都筑郡内における古代の遺跡からは、当時の人々が使った土師器・須恵器等が多く出土していますが、その中に少量ですが墨書土器が含まれています。墨書土器は、古代の人々が土師器や須恵器に文字や記号等を書いたものであり、文献には記録されていない当時の様相を知る上で貴重な資料です。この地域から出土している墨書土器の中で、私が特に注目しているものがあります。それは、「山口」・「山」・「口」という墨書土器です。

この地域の遺跡のうち、上麻生日光台遺跡からは「山口」が2点、「山」が5点、「口」が2点、合計9点の墨書土器が出土しています。「山」や「口」と書かれた墨書土器については、「山口」という墨書土器が出土していることから、やはり「山口」を表していると考えられます（第117号参照）。また、上麻生日光台遺跡の北側に位置する山口台遺跡群上台遺跡でも、「山」と書かれた墨書土器が出土しており、こちらも「山口」を表していると考えられます。この「山口」については、上麻生地区に「山口」という地名が残ることから、この「山口」は古代から続く地名である可能性が高いと思われます。また、上麻生日光台遺跡の北西側約1.2kmに位置する古沢都古東遺跡からも「山」と記された墨書土器が出土しており、こちらも「山口」を意味している可能性があります。こうした出土事例から考えると、「山口」が古代に遡る地名であるだけでなく、「山口」と書かれた墨書土器が出土している地域が、古代の都筑郡内に存在した里（郷）や水田の共同開発・経営を行っていた集団の領域に相当する可能性も想像されます。

このように、旧都筑郡地域の遺跡から出土している「山口」という墨書土器から、山口という地名が古代まで遡る地名である可能性が高いことが判明しました。その場合、古代・中世の文献等への記載が確認できないことから、公的な地名～都筑郡内の里（郷）といった名称～ではなく、通称に近いものであったことが推測されます。もしくは、奈良時代以降、新たに開発された土地に新たに付けられた地名であった可能性も考えられます。また、近世後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』の都筑郡上麻生村の項で、「山口」が小字名として記載されていることも、古代～中世においても、近世同様、この地域の通称的な地名であったことを示すものだと考えられます。

いずれにしても、古代の様相がほとんど明らかになっていない当該地域において、遺跡から出土した少量の墨書土器から当時の地名や地域の広がりを想像できたことは、非常に重要なことです。そして、現在まで残っていた地名が、古代にまで遡る可能性が分かり、現代の私たちにはあまり関係ないと考えていた古代が身近に感じられるのではないでしょうか。　（つづく）



シリーズ
「麻生の歴史を探る」　第90話

黒川炭

小島　一也（遺稿）

（唄）ヨーイトコサッサ　（拍子）ヨーイトコサッサ
（唄）よい娘を持つのは父親の貧乏　菜種3斗蒔きを荒らされた　ショウガナイナ
（拍子）荒らされた　菜種3斗蒔きを荒らされた　ショウガナイナ

この唄は名産黒川炭、黒川の炭焼窯の作り唄としていましたが、今は全く絶えてしまっています。

新編武蔵風土記稿の産物黒川炭の項に「村民農業の暇には毎年9月より焼始て、3月を限りとせり　黒川炭と唱えて焼ことは当郡または多磨郡にもあり、当村其もとなるべし、このことはいつの頃より焼そめしことは伝えざれど、近きことなるにや」と黒川炭は、黒川村が発祥の土地と記しています。

この炭は、薪に豊かな多摩丘陵のこの地方で、江戸時代当初から生産されていましたが、黒川炭として名声を呼ぶのが江戸中期、下総国佐倉で良質の炭が生まれたからで、田中長嶺という人が著した「炭焼手引書」によると、「寛政五年（1793）下総、小金の川上右仲なる者、櫟炭の良品を出す。これを佐倉炭の鼻祖（元祖）となす。真に木炭の模範にして、爾来その焼き方、諸国に伝搬して、大いに炭事業開進を致せり。」と述べています。

その焼き方が佐倉から江戸、甲州街道を西に進み、黒川炭と昇華するわけですが、良質の炭とは、木質表皮まで蒸し焼き、炭素化され、黒川炭は黒皮炭と評価されるに至ります。だがそれは、一朝にして成るものではありません。

その一つは窯の構築で、この地方の表土は関東ローム層で熱に弱く、寛政六年（1794）幕府の命でこの地の地理を研究した古川古松軒という学者は「この地方の土は、カマド、カベ土に用いられず、民家にカマドあるは稀で、いろり住居なり」と述べており、事実この頃台所にカマドがある家はありませんでした。これを突き破ったのが村民、力を合わせ、横穴を掘っての山砂層の採取でした。望ましい窯の原料は、荒砂6、細砂3、粘土 1 だと言われ、この炭焼き窯の構築は、当初、一人や二人で出来たものではなく、大変な苦労があったもので、先の祝唄の歌詞が頷けてまいります。

それともう一つ、良質の炭を焼くには窯の構造に加え、炭焼技術がありました。この地方の炭の原料の薪（まき）は、橡（くぬぎ）、楢（なら）の樹が多く、これ等は伐って1ヶ月後に焼くのが良いとされ、窯の中への熱の通りを良くするため薪を縦に入れ、熱源を得るため燃やす粗朶（そだ）の量や配置、空気の調整が薪を炭素化させ、窯から出る煙の色が黒から白色、薄青い煙になった時、入口や煙の出口をふさぎ、そのタイミングが炭焼きのコツとされました。通常、窯に火を付けて、止めるまで2日、薪が窯の中で炭になるまで6日間を要したといいます。焼きあがった炭は、四貫目（15Kg）づつ、茅（かや）で縦に編んだ炭俵に入れられ、仲買人等によって、布田道、津久井道を布田宿（調布）、江戸へと出荷されています。

この黒川の炭焼窯は近郊の村々に構築されていきますが、その生産高は弘化二年（1845）王禅寺村の名主による村明細書には「炭を焼く者十九戸（19 基）、一人平均 720 俵～800 俵を生産して江戸に出荷し、一人 8 両の現金収入を得、村では合計 152 両の収入があったと記されています。時代はくだって明治六年（1873）生田五反田村では年間 11,000 俵の生産をしており（高津田村家文書）、黒川村地誌（市史料）には、明治21年、黒川村戸数69戸、炭七千貫」と記されており、炭俵にすると 1,700 俵もの炭が東京に出荷され大変な副収入だったことが判ります。

年度		生産高
明治	5年	10,000貫
	20年	30,000貫
大正	10年	65,000貫
昭和	18年	3,320貫
	23年	6,787貫

柿生における木炭の生産高

柿生最後の市川祐さんの炭焼

この黒川炭の歴史は大正、昭和年代に続きますが、明治の頃の東京の炭の価格は10貫目あたりの平均 47.2 銭。米 1 俵（16 貫）2 円 50 銭。それが大正 10 年（1921）炭 10 貫の価格は 3 円 80 銭、米価は 1 俵 14 円 20 銭（黒川炭研究=広川英彦氏）だったと言われます。一方で多摩川炭とも呼ぶ粗悪品が出回ったこともあり、大正七年（1918）神奈川県は、改良窯の構築を1基 10 円の奨励金を出し普及させています。

しかし、昭和に入り木炭の統制や、庶民の生活の変化、化学燃料の普及は木炭を過去のものとしていきます。江戸時代から 200 年余、近郊近在でただ一人黒川炭を焼き続けた市川祐さんが最後の窯に火を入れたのは昭和 60 年 4 月のことでした。

参考資料:「川崎市史」「ふるさとは語る（柿生郷土史刊行会）」「黒川炭と庶民の歴史（広川英彦）」「くろかわ（はるひ野開発と地域の記録）」「新編武蔵風土記稿」

シリーズ
教育の歩み 第１部

学校の誕生と成長（８）

小林 基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆非エリートの教育◆

では、当時の初等教育はどうなっていたのでしょう。高等教育を身につけることが出来るエリートの家系に連なる人たちは、優れた家庭教師の手でラテン語の特訓を受け、長じて書物の読み方や解釈の訓練を受けるなど、高等教育の準備段階として必要な知識や言語を学んでいました。13 世紀も中頃になると、各地で中世都市が発達し、商人や手工業者が活躍するようになります。そうなると、彼らは取引に必要となる算術の基礎を学べる場を求め、さらに仕事上必要となる覚え書きなどを残す為に、簡単な読み書き能力を身につける場を必要とするに至りました。

成長する中世都市の様子

実のところ西洋世界では、ローマ・カトリック教会が末端の村々にまで網羅され、司祭や助祭が教区住民の魂の救済にあたっていたのです。ただし教会エリートは司教以上でしたから、司祭や助祭はラテン語などまるで読むことも書くこともできなかったというのが実情だったのです。

何とも情けない話ですが、それが当時の現実だったのです。ですからカトリック教会は、キリスト教の教典である聖書を住民の間に広めようとはせず、聖書は教会での礼拝のたびに、司祭が朗読してくれるのを熱心に聴き、その内容に関する解説を、しっかり聴きさえすれば、それで十分だという態度をとっていたのです。

私は、大学院生だった時期に、ドイツ大学史の泰斗島田雄二郎先生に、15 世紀初頭の司祭用の説教書のコピーを見せて戴いたことがあるのですが、驚いたことに説教書の左ページに書かれたラテン語の文章には、すべて現地語のルビがふられており、右ページには説教で話すべき事柄が現地語で書かれていたのです。これなら司祭や助祭は、開いたページのラテン語のルビを読み、右ページに書かれた文をそれらしく話せば良いのですから、さほどの教養がなくとも、司祭や助祭を務めることが出来たのです。

要するに、カトリック教会は、聖書を司教以上の上級聖職者と修道院の独占とすることで、自らの権威を保っていたのです。そうした教会で、住民サーヴィスの一環として、現地語の読み書きや算術の初歩が教えられるようになったのは、都市部の住民の仕事上の必要に、教会としても応えざるをえなくなったからでした。有力ギルドは、都市領主の許可を得て、自ら親方の子弟や徒弟たちの学びの場を用意しかねない勢いだったのです。

下級の学校には、二種類ありました。司教座教会や修道院は、当時の聖職者の心を捉えていたスコラ哲学を中心に、独特の閉鎖的性格を持っていました。従って、将来の大学入学を目指す者たちを対象に、初級や中級のラテン語を教えたり、文法の初歩を教えることには熱心でしたが、彼らが俗語と呼んで軽蔑していた日常語を教えたり、算術の初歩の計算を教えたりすることは、ありませんでした。つまりこちらは中等学校であり、中等教育の初期の姿だったのです。

庶民の子を対象とした学校は、町の司祭の開く日曜学校でした。司祭たちの多くは、ラテン語はいくつかの語句、説教用の慣用句を諳んじているだけでした。それ故、日常語の読み書きを学びたいと希望している手工業親方や小商人らの子ども達の教育を担当するには、まさにはまり役だったのです。彼らはいくつかの歌を教え、その歌詞を日常語で書いて示し、それを覚えさせることで読み方を教えました。それだけでも大変な進歩でした。

13～14 世紀の修道院生活の一齣

詞や文を「歌うように読む」という表現が、中世の話に良く登場するのは、この状態を指しています。

節をつけて読む、吟唱するという状態は、詞を味わうというよりも、詞を暗記した状態にピタリとあてはまります。ですから、読むことに比べると、書くことははるかに大変でした。書くことは、日常語の中でも常に良く使う言葉を、読むことを覚えた詞の中からいくつか取り出し、その綴りを覚えるのがやっとだったのです。この僅かな語句を書けるようにするだけでも、歌うように暗唱する作業に比べれば、遅々として進まなかったのです。それでも日曜学校に通う子供たちの数は、減りませんでした。

ここに当時の初等教育の現実がありました。ローマ・カトリックの全盛期には、初等・中等教育は、極めてゆっくりとしか進行しなかったのです。都市の庶民は、大変な苦労を払って、僅かな読み・書き能力を身につけるに留まっていたのです。変化は宗教改革と共にやってきたのです。16 世紀初頭（日本で言えば、戦国時代前期）のことでした。

（続く）

川崎市立日本民家園に移された麻生の歴史５
旧岡上村の高札場

東光院のすぐそば、現在岡上駐在所がある交差点に高札場がありました。「高札場」とは、江戸幕府からのいわば官報を一般庶民に通達する掲示が行われた場所です。幕府の威光を示すためにも盛んに利用されましたが、この場所が村内の交通の要でもあったのでしょう。目立つところに置かれた掲示板でした。ここに掲げられて内容を伝えた札が「高札」です。

この高札場は江戸時代の末期頃に造られたと見られていますが、昭和４０年初めには朽ち果ててしまいそうな状態であったので、何とか地元の了解を取り付けて昭和４２年、民家園開園の年に移築復原が実現したものです。掲示用の板はさすがに使えず、新たに取り付けられましたが、柱や屋根、柵は当初のままです。この新たな掲示板は現在民家園内の案内板として活用されています。

左の写真は当時実際にここに掲げられた高札の一例です。岡上の梶家に残されているものですが、現在は当史料館で寄託展示されています。　（有泉　眞男）

柿生郷土史料館催物案内　【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日　（原則として月4回）

5月　6・20・27日（毎日曜日）　**6月**　2・16・23日（毎土曜日）

◎開館時間:午前10時～午後3時　（5月13日は休館です。6月9日は開館未定です。）

第74回 カルチャーセミナー　中世の杉山神社の史料を考える

中世の杉山神社については、数は少ないのですが何点か史料があります。ただその中には、後世になって意図的に作られた偽資料も存在します。そのため、史料の真贋を見極めることが大切な作業になります。

今回は何点かの史料について、その真贋と、偽史料の見極め方をお話しします。

講師：中西　望介氏　（戦国史研究会会員）

日時：４月２８日（土）午後１時30分～３時30分

会場：柿生郷土史料館特別展示室

第14回 特別企画展　「くらしの窓」に見る柿生地区の今昔　その3
～　昭和から平成へ　～

昭和30年創刊のミニコミ誌「くらしの窓」が捉えてきた地域の姿を御紹介していますが、今回はその第3弾、昭和から平成への過渡期の頃の地元の姿を展示します。

期間　3月4日（日）～6月23日（土）

場所　柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館友の会へのお誘い

柿生郷土史料館では友の会への入会を常時受け付けております。手作り史料館に参画しませんか。

会員には「柿生文化」の送付や各種イベントへの優先受付などの特典を用意しております。この機会にぜひ入会をご検討ください。詳細は直接当館にお問い合わせいただくか、ホームページ http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo をご覧ください。